

聴取の意識を「音の羅列から意味のある音の結びつき」へ転換させる能動型鑑賞活動への試み

「大地讃頌」を発展的な鑑賞教材として
自分なりの意味を持たせた聴き方を体験させた実践例

新山王政和* 菅野裕子**

Masakazu SHINZANOU Hiroko SUGANO

*愛知教育大学創造科学系音楽教育講座

**静岡県焼津市立豊田中学校(元焼津市立大富中学校)

1. 本報告の概要

筆者の一連の報告の趣旨は、「すべき」のような啓蒙的な論議を交わすことのみで終始することではない。小学校や中学校で取り組まれた有効な実践を紹介することによって、他教科教員から「趣味性が高い」と曲解されることが決して少なくない音楽科の授業に対する誤解を解き、社会からも正しく評価されるように導くことを目的の一つにしている。併せて、音楽の授業が現代的な課題や問題にも対応可能な有益な活動を提供し得る場であることが、広く関係者に理解されることをめざしている。

本報告では最初に、小学校や中学校の音楽の授業が置かれている状況について、他分野や一般社会からどのように見られ、評価されているのかを手掛かりとして整理した。その上で、今まさに最終段階に入っている次期学習指導要領改訂作業の審議状況を鑑み、今後の音楽科に求められていると考えられることを所見にまとめた。この次期学習指導要領改訂の作業の中でも特に重視されている「鑑賞」の分野について、筆者は「思いや意図・意思を持って批評的・分析的に曲を聴く力」を育むためには、「生徒の能動型鑑賞の授業スタイル」が最も有効であると考えており、数年に亘って有効な実践例の模索とその検証を続けている。^{*1} 今回の報告では、静岡県焼津市立豊田中学校の菅野裕子教諭が昨年度同市立大富中学校に於いて行った「合唱曲『大地讃頌』を発展的な鑑賞教材として取り上げた実践」を紹介し、その効果と妥当性の検証を試みている。これはピアノで演奏された既知の合唱曲をテープで繰り返し聴くことで、「音の3要素：音高(pitch)・音色(tone)・強弱(dynamics)」と、「音楽の3要素：リズム、メロディー、ハーモニー」からなる音楽構成要素を目星や手掛かりにしながら曲を分析的に聴いていく聴取の方法、つまり「音の羅列を、意味のある音の繋がり(メロディー)や重なり(ハーモニー)、動き(リズム)へ変換する聴き方」を体験させたものである。この活動は「素材を知り、素材の違いを感じ取り、素材

の使い分けを考える」という、音や音楽の機能を探る原体験の集積に他ならない。そしてこの活動で特にユニークなのは、「自由に、なんでも」のように抽象的な指示によって漠然と楽曲を聞かせるのではなく、特定の要素にターゲットを絞って聴かせたことである。今回の実践の場合、強弱とハーモニーの二つの音楽構成要素に限定し、それを探り聴き取らせる体験を通して、「曲を分析的に聴くと言うことは、いったいどういうことなのか」について考えさせ、それを生徒間で共有させていた。本報告では、このような活動が「分析的な聴き方をめざした鑑賞」への過渡期的な導入ステップの一段階として有効に機能するのかどうか、筆者独自の視点から考察を試みている。

2. 小学校・中学校の音楽科を取り巻く背景と問題点の洗い出し

現在、国を挙げて教育に関する議論が活発に行われているが、小学校・中学校に於いて教育活動の重要な一角を担っているはずの音楽科に対して、同じ教育関係者からも適正に評価されていないのではないかとthinkざるを得ない場面に出会うことが少なくない。長くなるが、音楽科がどのような状況に置かれているのか、本報告を始める前に現状を冷静に分析し、問題点を共通理解にしておきたい。

特に、音楽科の教員だけで授業研究が行われる機会が多い中学校の場合、管理職教員からも「音楽の授業は授業者の趣味性が高い」と誤解されている例もあり、さらに深刻なことに「元気よく歌を歌わせておけばよい」等の誤った価値観を持たれている場合すらあった。広く社会へ目を向けるとその評価はさらに厳しいものとなり、中には「将来サラリーマンになった時に役立つカラオケの練習をさせる」とか、「海外駐在員になった際に恥をかかないように古今の名曲を覚えさせる」等の驚くべき言葉を耳にすることもあった。このような発言に触れたのは筆者だけではなく、音楽関係の雑誌や教育雑誌の記事の中にも散見するし、研究会や

フォーラム、シンポジウム等で耳にされた方も少なくないだろう。多くの音楽科教員が限られた授業時数の中で日々努力しているにも拘わらず、このように誤った見方がされていることを筆者は大変残念に思う。

この不本意な評価を受けるに至った原因の一つとして、他教科の教員が一教科としての音楽の授業の意義を正しく理解していないことや、一般の人々の音楽科に対する認識の低さなど考えられる。しかしそれ以上の要因に、音楽科教員サイドから周囲の教員や社会・保護者へ向けて「音楽科の授業では、子ども達のどんな成長をめざして教育活動を行っているのか」というアピールを積極的にしてこなかったことが考えられる。教科の専門に拘わらずクラス担任を持ち、教科の枠を取り払って研修を頻繁に行う小学校では音楽科教員だけで内へ閉じてしまうことは稀だが、中学校の場合はその危険性は決して低くない。これでは、いくら良い授業実践を深めて研修を積み重ねたとしても、他教科の教員からの適正な理解は得にくいであろう。そして、それらの教員から受けた評価や意識が、そのまま保護者の認識へと繋がってしまいかねない。このような「何のためにあるのか分かりにくい教科」、そして「何を目的にしているのか実体を掴みにくい授業」という誤ったレッテルを剥がすためにも、是非、授業で行う音楽科では子ども達に何を学ばせ、何を身に付けさせ、何を育むのか、教科の存在意義にも立ち還った実践と検証を深め、教科の理念が反映されるような授業研究が積み重ねられることを願っている。この報告で実践を分析の対象として取り上げさせて頂いた菅野教諭によると、他教科教員の着眼点は新鮮で、特に「数学では答え方を学習してから本題に入る」というアドバイスはとても参考になったという。これ以外にも鋭い指摘を受けた反面、教科としての音楽科の特質について説明し理解を得るチャンスにもなったようである。このように、議論の場にも積極的に上がって学校内での風通しを良くし、発信したり発言したりすべきことはアピールし、要求することはしっかり求めていく、このようなオープンな姿勢への転換が今後の音楽科へ求められているのではないだろうか。

以上のような状況を鑑み、筆者自身は小学校や中学校の音楽科の授業の意義について、これまで次のように愚見をアピールしてきた。^{*2}

音楽の様々な活動を体験し、練習のプロセスを経ることで、子ども達は「計画立案力(練習の段取りや、目星・見通し等をつける力)」と「問題解決力(必要な知識を学ぶこと、技術を身に付けること)」を獲得する。それにより、何かを為し得た「達成感」も体感できる。そしてこれらの活動を繰り返すことにより、子ども達には「自己実現の力(スキル)」が培われる。

自分自身に必要な知識や技術レベルを判断したり、演奏表現に関する思いや考えをまとめる活動の中で、

自分自身を見つめなおすことによって「自己理解の力」を身に付けることができる。さらに、他者の意見や思いを理解しようとする姿勢から「他者理解の力」も身に付けることができる。そして実際の演奏場面は、音楽や演奏表現に対する考えや意見を伝え合い、理解し共有し合う場面や、互いの意見を比較・分析する場面に満ちているだけではなく、相手を思いやり相手の思いを汲み取る経験も求められることから、これらの「互いに係わり合おうとする活動」を通して、子ども達の「言語コミュニケーションの力」や「非言語コミュニケーションの力」を育むことができる。

音楽科の授業では、緊急かつ現代的な最重要課題としてその不足が懸念されている「人と人との関わりから生まれる豊かで多彩な刺激に満ちた活動」を効果的に提供することができる。そこでは演奏表現を工夫したり、音楽を創る、音を感じる、音楽を聴き取るような数多くの活動を通して原体験を蓄積する場面や、それらを自分自身で試してみたりする実体験に満ちている。また他者との係わり合いだけではなく、教師からの働きかけや教師とのやり取りそのものもよい刺激となつて、思考と体感が融合するきっかけにも満ちている。

「知識や技術は体験によって身に付き、体験を繰り返すことが経験へと繋がる」のだが、そのスパイラルな活動の原動力や次のステップへの動機付けの一つとして、生徒の思考プロセスを経た活動や思考判断を有効に活用することが可能である。なぜなら、これらの思考を伴った活動とは、我々が楽曲を解釈し演奏表現を工夫したり、演奏や楽曲の聴取に必要な知識や技術を獲得するプロセスと共通のものであり、さらに音楽表現上の知識や技術とは、思考による裏付けによって「より生きた知識や技術として、実感を伴って身に付く」ものであることを、我々指導者は経験知として熟知しているからである。

筆者が先行研究に於いて提案してきた「イメージングをコアにした活動」もこれに通ずるもので、「自分自身で考えて演奏を創り上げていく活動」や「自分なりの手掛かりを見つけて、アイデアや意味を持って楽曲を聴こうとする力」こそが、今の時代に求められる音楽の基礎・基本の力にも繋がり、音楽が与していきける「生きる力」にもなり得ると考えている。そして、「自分なりの意志や意図を持って演奏表現を工夫することや、「自分なりの手掛かりを抛り所として、アイデアや意味を持ちながら楽曲を聴く」ことは、音楽以外の他分野に対しても様々な波及効果を期待できるのではないかと考える。

3. 学習指導要領改訂に向けた審議状況

次期学習指導要領改訂の作業は、遅くとも2008年春

までに発表されることをめざして、今まさに本格的な議論が交わされる段階へと至っている。これまでの審議経過は「文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会芸術専門部会審議記録」として公にされているが、その中から今回の改善の方向性と小学校と中学校ごとに示された改善例の概要について触れておきたい。^{*3}

まず、「改善の方向性」として提案された内容について、その骨子を紹介する。

[目標]表現や鑑賞の活動を通して、感性を働かせて音や音楽を感じ取り、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成し、豊かな情操を一層養う。多様な音楽及び音楽と生活とのかかわりに関心を持ち、生涯にわたって音楽文化に親しむ態度を育てる

[豊かな感性や情操を育てるための内容の改善について]全ての音楽活動の支えとなる指導内容を「共通事項」として示し、感性を働かせて音や音楽を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する。～中略～創作については、学校・学年段階に応じ、音を音楽へと構成していく過程を大切にすることを示す

*筆者注：共通事項として扱う内容について次の例が示されている。「音楽を形づくっている様々な要素の働きが生み出す雰囲気やよさを感じ取ること。音楽に関する記号や用語を音楽活動と関連付けながら理解すること」

[音楽と生活とのかかわりについて]音によるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわる態度を育み、生活を明るく潤いのあるものにする音楽の役割を実感させるような指導を重視してはどうか

[鑑賞の指導のあり方]音楽のよさを生み出している様々な要素の働きなどを聴き取ったり、音楽に対して、根拠を持って自分なりに批評したりすることのできる力を育成する指導を一層充実する

[我が国の音楽文化などの指導のあり方]我が国の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着を持つとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、各学校段階の特質に応じて、我が国や郷土の音楽の指導を一層充実する

この「改善の方向性」を受けて、小学校学習指導要領（音楽科）の改善例として、次の5点が示されている。

「表現領域（歌唱、器楽、音楽づくり）」、「鑑賞領域」及び「共通事項」で内容を構成する。「共通事項」については、例えば音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを聴き取り、それらの働きによって生み出される音楽的な面白さやよさを感じ取れるようにする

音楽づくりについては、生活の中にある音に耳を傾けたり様々な音を探したり音をつくったりして音の面

白さに触れるようにする

鑑賞領域においては、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みのかかわり合いを聴き取る力を育て、それによって音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取り、自分なりの価値観を持てるようにする。さらに、鑑賞での指導内容と「歌唱」、「器楽」、「音楽づくり」の指導内容との関連が明確になるようにする

唱歌や民謡、郷土に伝わるうたについて、さらに取り上げられるようにするとともに、歌唱共通教材の扱いについて充実を図る。鑑賞教材の選択の観点について、現行で高学年に位置付けられている我が国の音楽についてさらに取り上げられるようにする

音楽学習が児童の生活とかかわりのあるものとなるように、児童の身の回りの中にある音に親しむようにするとともに、児童の生活の中でよく耳にする音や音楽とのかかわりを大切にされた指導内容を示す。また、コミュニケーション能力を伸ばす観点から、音遊びや音楽遊びを通じて他者とのかかわるようにする

同じように、中学校学習指導要領（音楽科）の改善例として、次の5点が示されている。

「表現領域（歌唱、器楽、作曲）」、「鑑賞領域」及び「共通事項」で内容を構成する。「共通事項」については、例えば音楽を形づくっている様々な要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ること、音楽に関する用語や記号などを音楽活動と関連付けながら理解することなどを具体的に示す

作曲については、音を音楽へと構成する楽しさを実感することができるように、例えば、用いる音を限定して旋律を作ったり、音素材を選び、まとまりを工夫して音楽を作ったりする

鑑賞領域においては、音楽に関する言葉などを用いながら、音楽に対して、生徒が、自分なりの根拠をもって批評することのできるような力を育成する

我が国の伝統的な音素材の特徴などを生かした学習を充実する観点から、和楽器については、簡単な曲の表現を通して、伝統音楽のよさを一層味わうことができるようにするとともに、我が国の音楽文化に親しみ一層の愛着をもつ観点から、我が国の自然や四季、文化、日本語のもつ美しさなどを味わうことのできる歌曲がさらに取り上げられるようにする

学習全体を通じて、音楽文化の多様性を理解する力の育成を図るとともに、音環境への関心を高めたり、音や音楽が生活に果たす役割を考えたりするなど、音楽と生活や社会とのかかわりを実感できるようにする

この中で特に注目する点は、「表現」と「音づくり・作曲」の分野にまたがって「音の3要素（音高・音色・強弱）」や「音楽の3要素（リズム、メロディー、ハーモニー）」等の音や音楽を構成しているものに対する感

覚を育むことと、音響的な音の羅列を「意味のある音の結び付き」へと変換するプロセスを体験・学習させたり、音楽の仕組みを理解させようとしていることであろう。そしてこれら両分野の活動とも密接に結び付けながら、鑑賞においても感性を働かせて音や音楽を知覚し、自分なりの聴き方で感受する思考判断の力を養うことが求められている。ここでは、音響的な音の羅列を聴き、そこへ自分なりの意味や美しさを見いだす力を養い、さらに違いや類似性を自分なりの言葉で表現する力、つまり分析的・批評的な聴き方を身に付けさせることを重用視しているものと考えられる。しかし残念なことに、これまで歌唱や器楽の活動に比べてこの分野の実践が必ずしも積極的に取り上げられてきたとは言いにくい。よって今後は、特に学校教育活動の枠組みの中で実質的な授業時数を確保しにくい中学校に於いて、鑑賞と作曲の充実をめざした実践が数多く試みられ、積み重ねられ、深められることを期待している。

4. 生徒自身による能動型の鑑賞活動を模索した実践例の紹介

これまで述べたとおり筆者は、生徒へイメージングや思考を伴った活動を通じて自ら様々な音楽構成要素（音の3要素：音高・音色・強弱、音楽の3要素：リズム、メロディー、ハーモニー）に気付かせることで、「音の羅列を、意味のある音の繋がり（メロディー）、音の重なり（ハーモニー）、音の動き（リズム）へ変換する聴き方」を体験させ、さらに「それら进行分析し感じ取る力を身に付けたい」と生徒自身へ思わせるような実践を希求し続けている。つまり食材そのものを知ること、「食」を楽しんだり、色や画材の性質や機能を学ぶことで絵画を楽しむことと同じように、音や音楽を聴き取りそして感じ取る原体験を集積するプロセスを通じた実践を模索している。その中で筆者が知り得た有益な実践を、後の教育活動への礎とするべく紹介してきた。

前回の報告では、静岡大学教育学部附属島田中学校の中野直幸教諭による「指揮動作を取り入れた能動型の鑑賞の授業実践」を取り上げて分析を試み、次のような報告を行っている。^{*4}

この実践は、主に次の二つの活動で構成されていた。

ベートーベン作曲交響曲第5番について、音を抜いた指揮者の映像だけを見て、指揮棒の動作速度や動かし方、指揮者の動作の様子や顔の表情などから、曲の雰囲気や演奏表現を推理し、どの楽章のどの部分を演奏しているかを考える

同曲第1楽章の冒頭部分について、自分なりの指揮の振り方を考える。グループ、そして全体で指揮者役を立て、どのように演奏して欲しいのかを指揮棒の動きから読み取ったり、指揮者役の生徒は自分の意図や

思いをどのようにして伝えたらよいのかを考えた

この二つの活動を通して、生徒は指揮者が意思や意図を持って演奏表現を練り上げ、創り上げているということや、その指揮者の思いや意図を推理して読み解くことの楽しさを、実体験を伴って理解していた。さらにそのプロセスにおいては、体験を通じて様々な音楽構成要素を生徒の中で「意識化」させ、生徒の中に内在していた知識や経験知を生きた知識や技術へ結び付ける活動や働きかけが工夫されていた。

そしてこの実践に対する検証の結果に基づいて、主に次の3点を提案した。

内的聴覚を活用することで、生徒が演奏者の立場になって、様々な音楽構成要素を手掛かりにしながら主体的に聴く「能動型の鑑賞指導」というスタイルの効果が実証された

生徒は、指揮動作を工夫するだけでなく、同時にそこから生まれてくる音楽を頭の中で思い浮かべることができていた。これは思考プロセスを経たイメージング活動の有効性を示していたものと考える

音楽の様々な要素を手掛かりとして分析的に捉える聴き方では、思考判断がより活性化される

今回の報告では、静岡県焼津市立豊田中学校の菅野裕子教諭によって同市立大富中学校で行われた、既知の合唱曲である「大地讃頌」を発展的な鑑賞題材として取り上げて、生徒へ曲を聴くための自分なりの手掛かりを考えさせそして持たせた実践を紹介するとともに、その活動の有効性を検証している。そして、鑑賞への過渡期的な導入ステップとも言えるこの活動が、意志や意図を持って楽曲の聴取へ臨む「能動型の鑑賞」へと繋がり得るのかどうか、筆者独自の視点から分析と考察を試みてみたい。

4.1 既知の合唱曲を題材として鑑賞への過渡期的な導入ステップを試行した実践の概要

菅野教諭によるこの実践では、これまで何度も合唱して楽曲を熟知している「大地讃頌」を敢えて鑑賞の題材として取り上げることで、自分なりの手掛かりやマークを抛り所として聴く活動を体験させ、目星を付けながら分析的に鑑賞するために必要な基礎的なスキルを身に付けさせることをめざしていた。具体的には、授業者によって作られたピアノ演奏による「大地讃頌」のテープを、楽譜を頼りにしながら聴き取らせることで「楽譜から何を読み取ることができるのか?」、「楽譜を読むことで何が分かるのか?」ということを追求させていた。その活動を通して生徒は、曲を聴き取る「手掛かり」や「キー（鍵）」を考えて「目星」を探し出すだけでなく、独自の「聴き方」や「視点」を持つことを楽しめるようになっていた。これに止まらず、各自が見つけた手掛かりや目星を意見

交換することで、他者の聴き方と比べて新たな発見をしたり、他者の意見に同意しそれを共有したり、論議したりする楽しさまで体験させることに成功していた。

授業は全2時間から成り、本報告で取り上げた研究授業（本時）は第1時間目にあたる。

1 / 2時目（本時）:

楽譜を見ながら、ピアノ演奏による歌詞の無い「大地讃頌」のテープを聴かせて、曲の構成について考えさせ、意見を交換させる。その際、グループごとにテープを繰り返し自由に聴かせることで、歌詞を手掛かりにするのではなく、ハーモニーやその微妙なニュアンスの違い、そして強弱を手掛かりにして作曲者の意図を類推させる

2 / 2時目:

カンタータ「土の歌」を全曲通して鑑賞させる。歴史的な背景、全7曲の関係、作詞者や作曲者が伝えたこと等についても考えさせる

また、この実践の立案時点に授業者によって設定された目標は、次の3点である。

グループ内で意見交換と楽曲の聴取を繰り返させることで、鑑賞の手掛かりとなる「曲の聴き方の視点や着眼点」を増やし、生徒をより深い鑑賞へと導く

この活動で得た鑑賞の手掛かりを、鑑賞領域だけではなく歌唱にも活用できることを理解させる

多角的に捉えたり、一つのことに拘りを持って考えたりすることを、生活する上で様々な場面でも活用しようとする意欲や気持ちを持たせる

4.2 研究授業の授業設定の概要

次に、本報告で分析の対象とした研究授業の概要を紹介しておく。

題材名：合唱曲「大地讃頌」の仕組みを探ろう
教材

- ・大木惇夫作詞、佐藤真作曲「カンタータ土の歌」より第7楽章「大地讃頌」の楽譜（生徒の書き込み用）
- ・同曲の拡大コピー楽譜（掲示用）
- ・同曲の4声部と伴奏をピアノで演奏して録音したカセットテープ（グループの数だけ用意する）
- ・コンダクター・フルスコア（貸し出し用）

単元の目標

- ・作曲者の本当の意図や正解を見つけることはできないが、努力してそれを探そうとするプロセスが大切なことであることを理解させる
- ・今後の歌唱活動の表現に活かそうとする気持ちを持たせる

題材の評価基準：

- ・音楽の構成要素・表現要素の動きと曲想とのかかわりについて関心をもち意欲的に聴いている [関心・意欲・態度]

・音楽の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている [音楽的な感受や表現の工夫]

対象：焼津市立大富中学校3年生の6クラス

実施時期：2006年1学期、及び2007年3学期

4.3 分析の対称にした研究授業（本時）の骨子

本時の目標：

友達とかかわりながら、和音進行・強弱を手掛かりにして、曲の構成や曲の持つエネルギーなどについて理解を深める

授業構想の骨子：

「楽譜からどう考えるか」「楽譜をどう読み取るか」に重点を置き、音楽の諸要素の中から「ハーモニー」と「強弱」に焦点をあてて分析する。

ハーモニーに着目させたいので「合唱の部分をピアノで弾いたテープ」を用意して聴かせながら4部の重なりを味わわせる。その中から和音の持つ性格を感じ取り、それが繋がっていく和音進行の雰囲気から強弱へと結びつけていく。

強弱については楽譜に記されているが、さらに強弱と和声のかかわりを実感させるとともに、作曲者の意図やどのような効果を狙っているのか等について考えさせたい。

さらに旋律同士の動きやかかわり、リズムについて眼を向ける生徒も出てくるであろうが、それらは「音楽の諸要素」のかかわりであり自然な思考の流れであると考える。

各グループの意見を全体場で紹介し、自分のグループでは気づかなかった新しい発見をさせる。そして、多くの考えを聞くことによってさらに作曲者の意図に迫らせたい。

授業の最後に、専門的な観点から授業者が楽曲分析したことから、その一部を紹介する。

実際の授業の大まかな流れ：

本報告はグループ活動が大部分を占めていたことから、時系列的な活動記録を記載することをやめ、ここでは活動の大まかな流れのみを記した。それに代わり、生徒の言葉や気づきについて、後の節に於いて整理している。

- ・生徒は、チャイムが鳴る前から自主的に既習曲を合唱している
- ・授業の最初に、本時の大まかな流れと活動の内容・めあて等を説明する
- ・各グループへピアノで演奏された「大地讃頌」のテープとカセットデッキ、書き込み用の楽譜を渡す
- ・生徒は最初とまどいながら演奏全体を通して聴いていたが、リーダーを中心に互いに気づいたことを述べ合うグループが増え始める
- ・意見を交換しながら、気になる部分が見つかる度に

その部分だけを繰り返し聴くようになる

- ・互いに自分の思いや考えを伝えようとして、意見交換が活発になってくる。この頃から楽しそうな声や驚きの声、感嘆する様子も見られるようになる。一方では、出された意見を確認しようとスピーカーに頭を寄せ合って真剣に耳を傾けている生徒も出てくる
- ・授業者は各グループを回って活動や議論に刺激を与えていたが、少しずつ意見を集約する方向でアドバイスを出し始める
- ・授業者が各グループを回って、グループの意見としてまとめるように生徒とやり取りを始める。生徒は教師へ自分達の言いたいことを説明し、教師と言葉を交わすことによって少しずつ意見が焦点化され、整理されていく様子が興味深かった
- ・グループ活動を終えてピアノの周りに集まり、授業者が生徒を指名して各グループで出された意見を発表させる。授業者が、前後のグループから出された意見と関連付けたり対比したりしながら集約している。それにより、新たな発見をする生徒や自分達の意見をより明確な形で再認識するグループもあった
- ・ひととおり意見が出たところで、授業者が注目させたいと考えていた「ハーモニー」と「強弱」に関する意見に振り返って、さらに生徒へ説明を求めていく
- ・授業者が練習番号Eの2小節前の部分でソプラノとバスの音高が最も離れていることを指摘して「ここで一旦曲が締めくくられるのではないか」という授業者自身の意見を投げかけた
- ・終了時刻が迫ったので、曲尾のハーモニーが「アメン終止」と呼ばれるものであることを説明し、「作詞者がクリスチャンであったことを作曲者が意識したのかもしれない」という授業者の意見を添えて、授業が終了する

4.4 生徒から出された気づきや意見

授業中に出された生徒の発言や意見、気づき等について、授業者と筆者が拾うことのできたものを次に整理しておく。中には読み取りが甘いものや根拠が薄いと思われるものもあるが、生徒はこのように興味深い発見や思いを自由に数多く口にしていた。ここへ記したように、自分で見つけた聴き方や手掛かりを積極的に披露し合える雰囲気を作れたことが、本実践を成功へ導いた鍵になっていると思われる。

『冒頭から間奏の部分』

- ・「ひとのこら」から階段みたいに重なって行って「その立つ土に感謝せよ」へ繋がっている
- ・地層みたい。広がりを感じる
- ・「その立つ土に感謝せよ」は最後に一つになって大きくなっている。音も高くなって盛り上がる
- ・歌詞の中で強調したい部分を間奏にしているのかも

しれない

- ・間奏に入る直前、ソプラノ以外は半音で動いている
- ・間奏に入る直前の和音は、ちょっと変わった響きがする。違う感じがする
- ・和音の色が変わる。微妙な終わりの感じがする
- ・アクセントがついている音は、メロディーになっている
- ・アクセントで迫力を出している
- ・間奏が場面転換している。よみがえり。回想

『間奏が終わる練習番号CからEのコードの前まで』

- ・再び小さくなる
- ・やさしくてきれいなハーモニー / 響き
- ・ここから少しずつ大きくなって「たたえよ土を」のffへ向かって行く
- ・練習番号Dでは男声はすぐffになり、女声はfそしてff。むしろ歌詞が強調される感じがする
- ・4つのパートが揃ってffになった時に一番盛り上がる。揃った感じ
- ・ソプラノが高くなる時男声は低くなっている。広がりをもたせようとしているのか？

『練習番号Eからのコードの部分』

- ・静寂に戻り、そしてまただんだん盛り上がる
- ・まとめという感じ。最後という感じを強調したいのか？
- ・直前のffの高い音から低い音へ跳ぶのは不安な感じ。最後に希望を持たせたいから？
- ・直前に広がっていた音の高さが、また狭くなる。音が集まる感じ
- ・音が階段みたいに上がったたり下がったり
- ・バスの音の高さがあまり変化せず揺るぎない感じ
- ・各パートは同時に音の高さが変わらない。ずれて動くし、上がれば下がるみたいな
- ・ソプラノは上がるが他パートは下がる
- ・ソプラノが全てを上を上に引っ張り上げている
- ・音楽が広がる感じがする。パワーアップしていく
- ・音の高さにあまり動きが無いのは最後を強調したいから？
- ・和音がどんどん変わって不安定な感じが続く

『終わりの5小節』

- ・ソプラノ以外は音の高さが同じでソプラノが引き立っている
- ・最後の和音でみんないきなり高い音へ上がる
- ・高い音で強く訴えている
- ・今までに無かった明るい感じのハーモニー
- ・目の前が明るくなった、人々の希望、木が枝を広げた感じ
- ・人々が悲しみから立ち直る雰囲気を出したいのか？

『楽曲全体について』

- ・曲全体を通じて pp から fff へ向かって大きくなっている
- ・大きくなったり小さくなったり、強弱に波がある
- ・最初の部分は弱く、間奏で強い 弱い、終わりの部分で強くなっている
- ・「ははなるだいち」は p と pp と ff がある
- ・きれいな和音と不思議な感じの和音が曲の雰囲気を作っている
- ・同じテンポだから重みを感じる
- ・感情が高ぶる部分は音が上下する
- ・歌詞を繰り返すところは何かがある。言いたいことがある
- ・音が低いと暗く感じる

4.5 授業後の生徒の感想と授業者が読み取った生徒の変容について

次に授業後に生徒が記した感想や、授業者が読み取った生徒の変容の様子から、特に注目したい点を挙げておく。

- ・歌詞があると歌詞にとらわれてしまってイメージが広がらなかったけど、音だけだとすごいイメージが広がった
- ・強弱など色々な工夫がされていて思いが伝わりやすい曲だと思った
- ・「大地讃頌」のイメージがすごく変わった。イメージが180度変わった
- ・初めは「暗い感じかなあ」と思っていたけれど、今はハーモニーや音程に多くの秘密が隠されていると知ったので、この曲がとても気に入りました
- ・話し合っていくと自分が思いもつかない所に気づいた人や、納得できる意見があったりして面白かった
- ・それぞれの班で発表を聞いた時も新たな発見があり、いい授業ができたと思った
- ・気付いていなかった意見に共感もできたし、すごいと思った
- ・あまり目立たない人のぼろっと言ったことが皆を納得させる意見だった、ということもしばしばあった
- ・グループ内で「じゃあこれはどういうこと？」とか「え、私はちょっと違う」とか、様々な意見が出てすごく充実した時間になりました
- ・一つのことにに対して、深く読みを入れて、何のためにこうしているのかなどを考えていた。
- ・最後の「ああ」という言葉は意味深いと思う
- ・「感謝せよ（間奏に入る直前の偽終止和音）」の部分の音程が中途半端な感じがするので、そこがなぜそんな音程なのか知りたいと思いました

* 歌唱を苦手と感じている生徒が自分の思いを十分伝えることができ満足していた表情がとても印象的

だった（授業者による読み取り）

- * 今まで一番楽しい音楽の授業だった（授業者と生徒の会話より）
 - * テンポを変える記号をゴタゴタ付けていない。飾りが無いからこそ重みがある（授業者と生徒の会話より）
- このように、生徒が口にした飾り立てていない素直な発言や思い、そして素朴ではありながら核心に迫った議論等は、受身型に通り過ぎてしまう一斉聴取型の鑑賞の活動では見ることはできなかったと思われる。今回のように、まず自分なりに感じ取ったり聴き取ったことをグループ内で話し合い、それをお互いに確認しあったり疑問を投げかけ合うことで熟成化させ、さらに全体の前で披露しあう活動によって確かな意見にまとめる、このような活動を通して生徒は「楽曲分析の力」や「聴取力」を身に付けるプロセスを体験し、それを他者へ伝える「表現力」や「文章力」にも繋がっていったものと考えられる。

5. まとめと考察

生徒の聴取レベルを深めるために、授業者はグループを回りながら生徒に対して主に次のような働きかけを行っていた。

気づいたこと、感じたことをこまめに尋ねることで、生徒に自分自身の言葉で語ることを求める

どこからそう感じるのか？、なぜそう感じるのか？など、意見にはその根拠を求める

なんのためにそうしていると思うか？、その効果は何だと思うか？等、生徒の思考を揺さぶる

これらの教師とのやり取りを通して、生徒も思考を焦点化させることができ、自分自身の意見としてまとめることが可能になったと考えられる。

そして、授業者の読み取りによると、今回の活動を通して生徒は次のように変容していたという。

歌唱や演奏が苦手な生徒も自分なりの聴き方で曲にアプローチし、活発に意見を述べていた

こだわりを持って繰り返し曲を聴くことで、少しずつ曲の構造や仕組みを捉えることができるようになり、表面的な好き嫌いからしか意見を述べられなかった生徒も、次第に曲の内面やより深い本質、作曲者の意図や思い等にも気づくことができるようになっていった

音楽経験の多寡やレベルによって聴き方の視点や角度に差が見られたが、聴き取る力や感じ取る力には大きな差は見られなかった

これらのことを整理して、次のようにまとめる。

今回この活動を通して、生徒は音の3要素の一つの「強弱」と音楽の3要素の一つの「ハーモニー」へ焦点をあてて聴き取ることで、音響的な音の羅列を「意味のある音の結びつき」へと変換するプロセスを体験す

ることができていた。これは、音や音楽を知覚し自分なりの聴き方で感受する「思考判断の力」と、音の積み重ねや繋がりに自分なりの「意味や美しさを見いだす力」の両者が相まって可能になったものであり、さらに「音や音楽表現の類似性や違い」や、「他者と自身の聴き取り方の相違」を自分なりの言葉で表現することで、分析的かつ批評的に聴き取る力も備わっていったものと言えよう。この活動で体験した力は、今後他の楽曲を鑑賞する際に自分なりに思いや意図・意思を持って意識的に聴くことを可能にするとともに、歌唱・器楽の分野で演奏表現を創り上げていく活動だけではなく、音楽づくり・作曲の分野にも有益な効果を及ぼし得るものと考えられる。

また、授業記録を精読する際に紹介した、「(大地讃頌は)同じテンポだから曲に重みを感じる。テンポを変える記号をゴタゴタ付けていない。飾りが無いからこそ重みがある」という生徒の発言には驚きを禁じえなかった。言葉を弄して練り上げられた感想文よりも、よほど真髓を掴んだ説得力のある言葉だと感じる。これも、受身型に通り過ぎてしまうだけの鑑賞活動では得ることができなかつたもので、感じ取り聴き取ったことをグループ内で話し合うことによって身に付けることのできた表現力であろう。少なくともこの生徒は、今回の活動を通して意思や意図、自身で見つけた目星や手掛かりを拠り所にして「思いを持って曲を分析的に聴く」ことを体験し、その「自分なりの聴き方」を他者へ説明し、他者の聴き方ともすり合わせて議論する楽しさをも体感することができたと考えられる。その意味でも、既知の合唱曲を発展的な鑑賞教材として取り上げて「楽曲の聴き方」を生徒へ体験させた今回の活動は、鑑賞への過渡期的な導入ステップの一段階として非常に効果があり、有益であったと考える。この実践を礎として、今後、生徒が曲を聴くための「手掛かりやマーク、キー(鍵)、目星」をたくさん発見し、学び、知ることで、自ら「曲を理解するためのスキル」を高める活動へとステップアップされることを期待している。さらに、このような自分なりの曲の聴き方のスタイルを持つことの楽しさをも体感させられる活動を積み重ねることで、将来的にはファッションや見せかけではなく真の意味で自ら音楽に接し、生活の中に音楽活動を取り込み、それを楽しもうとするライフスタイルが養われるのではないかと期待している。

最後に、今回の菅野教諭による実践を特徴付けている点について、筆者が特に注目しているポイントを次のように掲げておきたい。

自由に漠然と楽曲を聞かせるのではなく特定の音楽構成要素にターゲットを絞ることで、その要素そのものを聴き取らせ、その変化や移り変わり、違いや使い分け等を聴き取らせる体験を通して、「曲を分析的に聴

く」と言うことは、いったいどういうことなのか」について考えさせ、体感させていたこと

生徒が既知の合唱曲に対して一步身を引いた客観的な目線や視点から触れることで、楽譜に秘められた「手掛かりやマーク」を拠り所にして、「キー(鍵)」を探し、「目星」を付けながら、独自の切り口から主体的に楽曲を聴く方法、つまり聴き方のスキルというものを知ったこと

これにより、漫然と曲を聞き流すのではなく、自分自身の意思や意図、思いを持ちながら楽曲を聴取する楽しさを体感させたこと

速度記号や強弱記号、ハーモニーの響き方等を手掛かりや目星にして楽譜に込められた作曲者の意図や思い、メッセージを読み解く際に、生徒は「思考判断」を迫られたこと

他者の意見や読み解き方とのすり合わせの場面では、「なんとなく」や「臆気な」ことを無意識下から導き出して自覚させ、それを他者と比較・分析させ、共有させたり議論させることで、自身の思いや意見の「言語化」に成功していたこと

生徒の言葉の中にあつた「聴く人には違いを聴き取って欲しい」という言葉や「歌う人はちゃんと歌って欲しい」から分かるとおり、思いや意思を持って分析的に楽曲を聴くことは、メッセージや意図を伝えたいという意識を持って演奏表現を工夫する活動の動機付けにも直結する

今回の報告で取り上げた菅野教諭による実践と、前回取り上げた静岡大学附属島田中学校の中野教諭による実践は、ともに鑑賞分野として独立させて曲を聴く活動だけに止まることなく、他の演奏表現や動作表現などの分野とも有機的にリンクさせることで意思や意図、思いを持って活動へ向かうことの意味づけや、それらを行うことの楽しさをも明確に示され、より高いレベルの高い鑑賞活動へと導くステップの一段階として設定されていたことを高く評価したい。

この実践を通じて体感(体験+感得)した「音楽構成要素を手がかりにしながら、音の羅列を意味のある音の結びつきへ変換しながら聴く方法」は、今後の様々な場面に於いて、物事や出来事を形づくる要素や成分を冷静に探り、一步身を引いて分析的に捉えようとする行動様式へと繋がっていくことも期待できる

今後の研究の深まりを期待しながらその動向に注視したい。

おわりに

某プロ指揮者は、練習中頻繁に「アイデアのある音」を奏者へ要求する。これは、何も考えずに惰性で音を出すことを戒めどんな音でも意志と意図を持って演奏すること、それを演奏者全員で共有すること、そして

その意思や意図を聴衆へ伝えたいという思いを持って演奏すること、これらを要求する言葉であると理解する。このことは、「演奏すること」と「聴くこと」が不可分であり、「音を出すこと」と「感じること」はともに関連し合い補完し合う感覚であることを示唆している。

また、よりプリミティブに捉えるならば、そもそも音楽とは「音の強さ」「音の高さ」「音色」と、その「並べ方」「繋げ方」「重ね方」という6つの要素の組み合わせによってのみ形作られ、その6つしかない要素の組み合わせ方や具合を加減調整したり工夫することで曲が作られる。そして我々は、その6つの要素を駆使してその楽曲を聴き、演奏を楽しむ。これらの音楽行動を鑑みるならば、その6つしかない要素に対する感覚を養うことや、その一つ一つを体感し得る原体験を用意することが、如何に重要なプロセスであるかを再認識させられる。なぜなら、音楽に限らずいかなる分野に於いても、「素材を知り、素材の違いを見分け、素材を生かす」ことは重要な基本知識であり、それを使いこなすことは欠かすことのできない基礎的な技術であり能力でもあるからだ。

これまでも折に触れて述べてきたが、再表現芸術であるヨーロッパ音楽を教材として取り上げる場合、話し合ったり試したりしながら演奏表現を工夫させることや、音の羅列を意味のある音の繋がりへ変換するための「楽曲を聴く手掛かり」を一人一人に持たせたり、音楽に対する「こだわり」を抱かせることは効率的ではないのかもしれない。しかし鑑賞の分野だけを見ても、教師が啓蒙的に説明して教え込むだけでは、「生きた知識や技術として楽曲を鑑賞する力を身に付ける」という生徒の音楽的自立には繋がりにくい。つまり、将来自らの意思で生活に音楽を取り込み、演奏会へ足を運んで鑑賞を愉しみ、意思や意図を持って音楽文化を支えてくれる「音楽レベルの高い聴衆」を育てることには結び付いていけないと思われる。

今回の菅野教諭による実践では、生徒の主体的な活動が難しいとされる鑑賞を取り上げて、音楽表現を組み立てる活動ともリンクさせながら生徒へ楽曲を聴くスキル（方法、聴き方）を体験させるとともに、それがさらに他の分野にも波及することを視野に入れて計画しておられたことに注目したい。今後も、生徒自らが曲を聴くための「手掛かりやマーク、キー（鍵）、目星」をたくさん知ることによって曲を理解するためのスキルを高め、「自分なりの聞き方のスタイル」を持つことの楽しさを体感させられるような授業を積み重ねていけることを期待している。

本報告を終えるにあたって、研究授業を分析の俎上に取り上げさせて頂いた静岡県焼津市立豊田中学校の菅野裕子教諭へ深く謝意を表したい。なお次ページ

に、菅野教諭が生徒の楽曲分析の一助となるように作成した『目でみる大地讃頌』～大地讃頌構造図～の写真を掲載しておく。ここでは強弱の変化が分かりやすく図形化されている。

[注]

- * 1 拙著、「イメージングを手掛かりに生徒の主体的聴取をめざした「能動型鑑賞授業」の模索」- 教え込むから導き出すへ、ヘルプからサポートへ: ビジネスコーチングスキルの応用 - , 愛知教育大学研究報告第56号, 2007
- * 2 次の先行研究を参照されたい
 - ・拙著、「今この時代だからこそ『クリエイティブな音楽活動』の実践を！」- コピキタス社会における『音楽の基礎・基本の力』としてのイメージングに着目して - , 日本音楽教育学会音楽教育実践ジャーナル Vol.2, No.2, 2005
 - ・拙著、「コピキタス化された社会における『音楽の基礎・基本の力』の問い直しと子ども自身の思考プロセスを重視した授業実践の模索」- イメージングと授業の構造化を視点とした分析とその考察 - , 愛知教育大学研究報告第54号, 2005
 - ・拙著、「コピキタス化された社会における『音楽の基礎・基本の力』の問い直し(2)」- 子ども自身の思考を伴ったイメージングのプロセスを活用した授業実践 - , 愛知教育大学教育実践総合センター研究紀要第8号, 2005
 - ・拙著、「グループダイナミクスを活かした『イメージングを通して音楽表現を創り上げる活動』の模索」- 課題を見つけ出す力と問題解決の段取り力を育む2つの実践を掘り出して - , 愛知教育大学研究報告第55号, 2006
- * 3 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会審議記録 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo3/siryu/004/06082203/009.htm
- * 4 前掲書1

[参 考 文 献]

- * ドン・G・キャンベル(北山敦康訳), 「音楽脳入門」, 音楽之友社, 1997
- * 國安愛子, 「情動と音楽」, 音楽之友社, 2005
- * 斎藤孝, 「頭がいいとは、文脈力である」, 角川書店, 2005
- * 拙論一覧 <http://www.ongaku.aichi-edu.ac.jp/profile.html>

(平成19年9月18日受理)

